

博士學位論文

内容の要旨及び審査の結果の要旨

課程修了によるもの（課程博士）

第10号

平成29年3月

東北福祉大学

は し が き

この冊子は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日）第 8 条の規定による公表を目的とし、本学にて博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果を収録したものである。

課 程 博 士

總 合 福 祉 学 研 究 科

社 会 福 祉 学 専 攻

氏名（本籍）	陳 麗娜（中国）
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記の番号	博甲第10号
学位授与年月日	平成29年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条1項該当（課程博士）
学位論文題目	「認知症高齢者ケアにおけるアセスメントに関する研究」
論文審査委員	主査 教授 大橋 謙策（東北福祉大学） 副査 教授 三浦 剛（東北福祉大学） 副査 教授 加藤 伸司（東北福祉大学） 副査 教授 白澤 政和（桜美林大学）

《論文内容の要旨》

I. 論文の構成と概要

1. 論文の概要

本研究の背景は、認知症高齢者の人口が増えて、重度化になる状況の中に、従来の認知症高齢者ケアのアセスメントをチェックする項目が不足している内容がいくつかあるということである。本研究は認知症高齢者ケアにおけるアセスメントをテーマとし、従来の認知症高齢者ケアアセスメントの不足している内容をチェックするところから始まった。研究が進んでいく中で、DCM 法と TEACCH プログラムの評価視点の応用できる可能性を示している研究がいくつかあるために、新たな認知症高齢者ケアにおけるアセスメントの必要性が明確になった。具体的には、DCM 法と TEACCH プログラムの評価視点を参考し、アンケート調査を行った。その結果、「①聞こえの保障の耳垢や補聴器などの定期的なチェックの問題である。」、「②コミュニケーションを取るための意思確認の方法に関する内容である。」、「③ケアを受ける側生活リズムや生活習慣を維持することを重視し、その人らしい個別的なケアを提供する。」、「④ケアを受ける側の生きがいを感じられることやどのような役割を担えるかについて確認し、自己実現させることである」という 4 つの従来のアセスメント不足している内容が明確になった。また、「①居心地いい環境の整備」、「②写真や道具など方法を使って、高齢者とコミュニケーションを取る。」、「③心身機能を維持する身体介護に比べて、BPSD の重視は高くはない。」という 3 つの重要だと認識しているが、適切に実践されていない内容も明らかになった。

本研究では、従来の認知症高齢者ケアにおけるアセスメントが必ずしもなもの十分ではなく、新たなアセスメントの視点と枠組みの構築が必要であることが明らかになった。

しかし、「環境の整備」に関して、仮説の段階では、温度と湿度の 2 つの視点は分けずに検討していたが、因子分析の結果、2 因子構造となった。「環境の整備」は重要であり、今後、さらに深めて検証する必要があると考える。

「直接的なケア」に関して、仮説の段階で、「身体介護」、「中核症状」、「BPSD の問題」の 3 つの視点を上げたが、因子分析の結果では、1 因子構造となった。その理由について、実際に現場で、直接的なケアを実施する際に、現場の職員たちが「身体介護」、「中核症状」、「BPSD の問題」の 3 つの視点を分けて、十分に実施できていないのではないかと考えている。個別ケアを重視する場合、この生理的な「身体介護」の部分、医学的な「中核症状」に関する部分、認知症の「BPSD の問題」の部分は、もっと意識して分けて対応する必要があると考えられるからである。

本研究で検討したアセスメントの視点を従来の認知症高齢者へのアセスメント項目の中に組み込むことで、高齢者の「真」の欲求を把握することが可能となると考えられる。つまり、認知症高齢者をケアする介護職や、その家族が、認知症高齢者の状態をみて、その

人に対する適切なケアを検討することができる。このことは、高齢者の「真」の欲求の確認と個別性を尊重するケアへと繋がる。

2. 論文の構成

序章 認知症に関するアセスメントの現状と課題

第1節 研究の背景

第2節 研究の目的と意義

第1章 従来の認知症ケアに関するアセスメントの現状と課題

第1節 高齢者ケアと尊厳

第2節 既存の認知症ケアの現状の分析と問題点の指摘

第3節 既存の認知症ケアアセスメントの分析と問題点の指摘

第4節 小括

第2章 社会生活モデルにおける認知症高齢者ケアアセスメントのあるべき視点

第1節 認知症高齢者ケアにおける DCM 法から学んで、ヒンドになる点

第2節 認知症高齢者ケアにおける TEACCH プログラムから学んで、ヒンドになる点

第3節 認知症高齢者におけるアセスメントの枠組みの構築

第3章 認知症高齢者ケアにおける評価内容に関する実態調査結果

第1節 調査の目的と方法

第2節 調査の結果

第4章 認知症高齢者ケアにおけるケア職員の意識に関する考察

第1節 第1節「回答者の基本属性」に関する考察

第2節 「ケア職員のケア認識」の考察

第3節 小括

第5章 ケアアセスメント視点に関する考察

第1節 ケアアセスメント視点に関する因子分析の考察

第2節 小括

終章 総合考察

第1節 本研究の概要

第2節 認知症高齢者ケアにおけるアセスメントの視点

第3節 総括 第4節 新たなアセスメントの枠組みと視点のイメージ図

第5節 本研究の限界と課題 謝辞 参考文献 資料：調査表

3. 論文の目的と展開

(1) 研究の目的

本研究は、認知症高齢者ケアのアセスメントに関する研究である。研究目的は、自閉症者を対象とした生涯支援プログラム「TEACCH プログラム」と認知症ケアマッピング (DCM

法) の考え方と大橋謙策やユニットケアの考え方を参照して、認知症高齢者ケアの視点を整理し、ケア職員のケア意識を明らかにすることである。また、自己決定、活動参加、役割の発揮の内容を包含したアセスメント枠組みを構築する上で、ケアアセスメント視点についても検討を行う。

(2) 研究の意義

本研究では、認知症高齢者ケアを提供する際に、従来の心身機能だけ重視するのではなく、認知症高齢者の意思を尊重し、生きがいや役割を發揮できる生活などを中心とするケアの枠組みとアセスメントの視点について検討を行う。加えて、従来のアセスメントの視点にあるように、生命・日常生活を維持することを重視する上では、「快・不快」などの生理的な感覚から生存することが持つ意味を大事にしなければならない。しかしながら、「快・不快」に関わる温度・湿度のような内容に関する先行研究や事例は未だ少なく、アセスメントにおいても不足しているといえる。そこで、本研究において、アセスメントの枠組みと視点を検討し直すことによって、従来の医学的なモデルによるケアの提供から、社会生活モデルへの転換へとつながるといえる。社会生活モデルにおいて、一人一人の高齢者の真の欲求を引き出して、それを尊重し、ケアを提供することが大切である。また、本研究では、物理的な生活環境を整備する上で、それにかかわる社会的関係や周りの人との絆を重視し、その人が生きがいを感じる役割機会の提供も大切だと考えている。

これらをアセスメントの中に組み入れることによって、その人を尊重し、本人が有する力を最大限に活かしながら、本人のなじみの暮らし方やなじみの関係が継続でき、その人らしい生活ができることにつながると考えられる。認知症になっても、健康な人と同じく自分の意思で、自己実現でき、一人の人間として堂々と生活できることは、大きな意義があるものと考ええる。

(3) 研究方法

第1部分 理論研究

理論研究としては、認知症高齢者ケア、アセスメント、具体的なアセスメント視点に関する文献を整理し、既存のアセスメントの問題点と他の評価法から参考できる視点を考察し、認知症高齢者ケアにおけるアセスメントの枠組みを検討する。本研究の理論課題は、DCM 法や TEACCH プログラムの考え方と大橋謙策やユニットケアの考え方を参照して、生命を維持する医学モデルのアセスメントではなく、居心地のいい場所で、自己決定でき、自己実現につながる社会生活モデルのケアアセスメントの検討である。「TEACCH プログラム」や「DCM 法」の考え方は福祉の分野で注目され、重視されている。DCM と類似した考え方は、日本でも大橋がすでに 1980 年代の論文でも指摘しており、日本地域福祉研究所の自己実現を尊重したアセスメントシート（「コミュニティソーシャルワークの理論と方法」菱沼、中島編）の中にも同じように考え方の調査項目が作られ、活用されている。

高齢者の尊厳を大切にするケアとは、その人が自分の意思で自己決定ができ、自分の生きがいや役割を担うことを含めたものと考えている。その人に対する適切なケアは、必ず

本人の意思に沿って、本人の好みの方法で提供されるものであると考えている。そのために、本研究では次の五つ仮説を立てた。

具体的な研究仮説

①環境の整備に関して、「快・不快」による生理的な感覚と聴力や補聴器などの聞こえの保障のアセスメント視点が必要ではないかということ。

②コミュニケーションを図るために、意思確認方法と意識確認する意識が必要ではないかということ。

③利用者の QOL を保障するためのケアの中に、1日の生活リズムの維持と尊重することが必要ではないかということ。

④社会的な生活を維持できるために、活動の参加、役割を發揮する機会の提供と個別性の尊重することが必要ではないかということ。

⑤福祉機器の活用が必要ではないかということ。

以上の5つに内容をまとめて、本研究の理論仮説を立てた

第2部分 実証研究

本研究では、アンケート調査による実証研究を行った。調査表の項目は DCM 法や TEACCH プログラムの考え方と大橋謙策や日本ユニットケア推進センターの考え方を参照して作成した。調査項目は、認知症高齢者ケアをしている介護リーダー、認知症介護指導者、認知症ケア専門士を調査対象者としたプレ調査に基づいて確定した。

また、プレ調査の中で、「虐待に当たる行為」に関する項目も必要であるという意見があったが、個別的なケアを徹底的に実施すれば、「虐待に当たる行為」は基本的に起こってこないのではないかと考え、今回の調査項目の中に、「虐待に当たる行為」に関する内容は加えなかった。

(4) 研究結果及び実証研究に伴う考察

①. 実証研究の結果

筆者がたてた 5 つの理論研究の仮説に基づいて考えると、現場の職員に対するアンケート調査の結果から、不足している内容と適切に実施されていない内容を明らかになった。

*従来のアセスメントの中で、以下の4つの内容が不足していることが明らかとなった。

- ・聞こえの保障の耳垢や補聴器などの定期的なチェックの問題。
- ・コミュニケーションを取るための意思確認の方法に関する内容。
- ・ケアを受ける側の生活リズムや生活習慣を維持することを重視し、その人らしい個別的なケアを提供すること。
- ・ケアを受ける側の生きがいを感じられることやどのような役割を担えるかについて確認し、自己実現させること。

*従来のアセスメントの中で、以下の3つの内容は、重要だと認識されているが、適切に実践されていないことが明らかとなった。

- ・快・不快などの居心地いい環境の整備

- ・写真や道具などの方法を使って、高齢者とコミュニケーションを取る。
- ・心身機能を維持する身体介護に比べて、BPSD への対応を重視されていないこと。

(5) 実証研究の結果に関する考察

従来の認知症高齢者へのアセスメント枠組みと視点は、必ずしもその高齢者本人の個別的なケアに有効なものではない。本研究の結果からは「快・不快」の問題、本人たちの役割などの内容を含めたアセスメントもきちんと見直す必要があるのではないかとということが明らかとなっている。個別なケアや本人を尊重するケアを実施するためには、単にアセスメントだけではなく、これに関する知識や技術の養成についても併せて考える必要がある。本研究で検討したアセスメントの視点を新たなアセスメントの枠組みに組み込むことで、高齢者の「真」の欲求を把握することが可能となると考えられる。つまり、認知症高齢者をケアする介護職やその家族が、認知症高齢者の状態をみて、その人に対する適切なケアを検討することができれば、個別性を尊重するケアへと繋がるものと思われる。

(6) 研究的に提起できる内容とその論理性と妥当性

本研究では、従来の認知症高齢者ケアにおけるアセスメントが必ずしもなもの十分ではなく、新たなアセスメントの視点と枠組みの構築が必要であることが明らかになった。

しかし、「環境の整備」に関して、仮説の段階では、温度と湿度の2つの視点は分けずに検討していたが、因子分析の結果、2因子構造となった。「環境の整備」は重要であり、今後、さらに深めて検証する必要があると考える。

「直接的なケア」に関して、仮説の段階で、「身体介護」、「中核症状」、「BPSD の問題」の3つの視点を上げたが、因子分析の結果では、1因子構造となった。その理由について、実際に現場で、直接的なケアを実施する際に、現場の職員たちが「身体介護」、「中核症状」、「BPSD の問題」の3つの視点を分けて、十分に実施できていないのではないかと考えている。個別ケアを重視する場合、この生理的な「身体介護」の部分、医学的な「中核症状」に関する部分、認知症の「BPSD の問題」の部分は、もっと意識して分けて対応する必要があると考えられるからである。

本研究において、3年以上の実務経験を持つケア職員を対象として調査を行った理由は、単に、ケア現場の状況の把握することだけではなく、新たな認知症高齢者ケアアセスメントの理論仮説を構築するためである。本研究では、理論課題の構築段階までであったことから、今後の課題として、各アセスメントの視点に関して、さらに詳細な項目及びその内容の検討を行う必要がある。つまり、本研究の内容を基に認知症高齢者ケアにおける新たなアセスメントツールの開発とそのツールの妥当性を検討することが今後の課題であると言える。

また、本研究で指摘してきたようなケアを提供していくためには、非常に詳細な作業が必要であり、そのための時間だけではなく、それが実現可能となる質の高いケア職員の確保も重要な課題となる。そのための養成の在り方、労働条件等の検討については、特に重要な今後の課題である。

《論文審査結果の要旨》

Ⅱ. 論文審査結果の要旨

1. 論文の要点と評価

本論文は、日本において大きな社会的課題になっている認知症高齢者への支援、ケアにおいて、従来展開されてきたケア観では十分でなく、かつその基になるアセスメントの視点、枠組みにおいても検討すべき問題があり、新たな視点が必要ではないかという仮説に基づき研究された論文である。

その視点は、限りなく本人の人間性の尊重と尊厳を護り自己実現を図るということは、本人の基本的欲求の発露である「快・不快」の感情の尊重や自らの存在・役割を認識できる機会・活動の重視、あるいはケアの原理である人間関係性を担保する上で欠かせないコミュニケーション方法の確立、重視ということであり、それらの視点が実際のアセスメントの項目において重視されているのか、また実際のケアワーカー達に重要であると認識され、実践化されているのかを明らかにしようとした論文である。

ケアにおけるアセスメント項目の必要性と作成においては、パーソンセンタードケアを推進しているイギリスのトム・キットウッド博士が開発した「DCM法」やアメリカのノースカロライナ大学で開発された強度行動障害者支援の「TEACCHプログラム」、あるいは日本の一般社団法人日本ユニットケア推進センターが開発した個別ケアを重視した24時間シートに基づく「ユニットケアプログラム」、あるいは大橋謙策が1960年代から指摘していた自己実現の重視、「快・不快」の重視の考え方等の先行研究を検討し、それらを敷衍、援用して作成した。

本論文は、認知症ケアにおける新たな視点を提起したと同時に、その視点に基いて作成されたアセスメント項目に対してのケアワーカー達の重要度の認識度、実際のケアにおける実践頻度、そのケアを行った際の実践満足度に関する量的調査を行い、その必要性を実証研究したものである。これらの点が本論文のオリジナリティであり、とても高く評価できる。

2. 論文に残された検討課題

上述したとおり、本論文の高い評価に影響するものではないが、実証研究の結果を先行研究と関わらせて論述させる点、あるいは今回の実証研究は調査対象が少数で、地域的に限定されており、あくまでプレ調査的側面が強いといったこと、あるいは新たな視点に基づくアセスメントによるケアを実現させる上での方策、課題についての指摘が十分でないという点、更には留学生であるが故の課題でもあるが、日本語の記述が今一つ整っていない点があることは指摘しておきたい。

3. 博士（社会福祉学）授与の可否

このように本論文には修正加筆すべき点もあるが、課程博士の目標である「一人の独立した研究者としての先行研究の渉猟、検討能力、研究課題に関する理論的論述能力、実証研究方法の習得と能力、起承転結を踏まえた論文の展開と論述能力」は十分習得し、満たしていると判断し、審査委員4人全員一致で博士の学位を授与することを認める。

平成29年 3月31日印刷
(非売品)
平成29年 3月31日発行

発 行 東北福祉大学
編 集 東北福祉大学大学院事務室
印 刷 株ホクトコーポレーション